ミカン生育情報

千　　葉　　県

平成 25 年７月号

平成 25 年６月の気象

平均気温は､第１と第５及び第６半旬は平年より 0.2～1.3℃低く､他の半旬は 0.2℃～1.6℃高く推移し、月平均気温は 20.8℃で平年とほぼ同じだった。

降水量は、第１、第２、第５半旬は平年の０～28％と少なく、残りの半旬は平年の 145～198％と多く、月合計降水量は 243㎜ でほぼ平年並みだった。

日照時間は、第１半旬と第６半旬は平年の 111～143％であったが、第２～第５半旬はいずれも平年を下回った。月合計日照時間は 111 時間で平年より 24 時間（18％）少なかった。

表１　平成 25 年６月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	平均気温　℃		降水量　㎜		日照時間 hr	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1	18.4	19.7	0	26	40	28
2	20.3	20.1	6	31	19	25
3	21.7	20.1	72	46	3	23
4	22.3	21.2	68	47	15	21
5	21.0	21.2	15	53	13	19
6	20.9	22.0	83	42	21	19
平均/合計	20.8	20.7	243	245	111	135

果実及び樹の生育

暖地園芸研究所における本年の着果量は、早生温州、普通温州とも昨年より多い。昨年は裏年だったため、本年は着果量が前年に比べ多い傾向である。果実肥大は順調で、生理落果量も平年並みである。樹勢は良好である。病害虫では目立った発生はない。

７～８月の栽培管理

摘果　　園地や樹によるバラツキがあり、それぞれの樹に合った摘果が必要である。着果量が少ない樹では、早生温州、普通温州ともに粗摘果は行わず、９月以降に仕上げ摘果を行う。

着果量が中程度の樹では、早生温州は内なり、裾なりの果実を全摘果し樹冠表面の果実を間引き摘果する。普通温州は内なり、裾なりの果実のみを摘果し、９月以降に間引き摘果する。

着果量が多い樹では、早生温州では、内なり、裾なりの果実を全摘果し、樹冠表面の果実を間引き摘果する。普通温州では枝別摘果や樹冠上部摘果とし、着果部位は９月以降に小玉や大玉、傷果を除く程度に軽く摘果する。

摘果の程度は、最終的な着果量の目安が１果当たり葉数で早生温州は 30 葉、普通温州は 25 葉で、粗摘果ではこの 70%程度に摘果する。

マルチ資材の被覆　高品質生産にマルチ栽培は有効である。被覆の時期は、早生温州７月下旬、普通温州は８月上旬を目安に開始し、収穫期まで行うが、土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、被覆の開始時期や地表面に対する被覆割合を調節する。マルチの適地は、水はけや日当たりが良く、着果量が中程度以上の園地である。水はけが悪い平坦な園地では、まず溝を掘り高畝にして土壌の乾燥を促し、併せて間伐、防風垣の刈り込みにより日当たりを改善する。

病害虫の防除

温州ミカン　そうか病多発園では梅雨時期でも薬剤散布を行う。

黒点病は幼果期から成熟期にかけて感染、発病する。発生源は園内及び周辺の枯枝なので、丁寧に枯枝を除去する。薬剤の予防効果は降雨によって低下するため、累積降水量 250㎜ 前後を目安に次の防除を行う。

ミカンハモグリガは夏葉が展開し始める７月下旬～８月上旬に急増する。幼木や若木、高接ぎした樹では特に注意する。新葉展開初期から７～10 日程度の間隔で２、３回薬剤散布を行う。３年生以下の未成木の場合、粒剤を株元施用すると効果的で、しかも散布作業も容易である。散布後、おおむね３か月間の効果が期待できる。前回５月下旬に散布していれば、２回目の散布は８月上旬になる。

ミカンハダニの重要な防除時期は梅雨明け期であるが、気象条件によって早晩があるので注意する。寄生葉率が 30%以上になった時点で速やかに防除を行う。

中晩生カンキツ類　８月中～下旬は黒点病やかいよう病の防除時期である。かいよう病は病原細菌が雨水によって伝播され、気孔や風ずれなどの傷口から侵入して発病するため、傷口を作らせないための防風対策やミカンハモグリガの防除を行う。台風前の薬剤散布が重要となる。

防除に際しては、千葉県農作物病害虫雑草防除指針を参考に行う。

《 生育情報の問合せ先 》

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹・環境研究室 電話 0470-22-2961

果樹の生育情報は千葉県ホームページ「農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。　http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html